

二次元ドリームノベルズ / PDF立ち読み版

レガシィハンター

魔宝怪盗

マジカル シャドー

Magical Shadow

小説 黒井弘騎

挿絵 桐島サトシ

第一章 魅惑の魔性——美しき女怪盗

第二章 禁断の罟——囚われし女怪盗

第三章 悦虐の尋問——淫獄の女怪盗

第四章 暴かれた正体——絶望の終焉

006

064

135

188

登場人物紹介

Characters



マジカルシャドー

巨大権力が保持する魔宝のみを盗み出す、正義の天才怪盗。
その正体は、不明。

かかむまや 各務舞夜

特殊部隊・ナイトハウンドに所属する新人婦警。天然でドジな性格。

ゆうきさくら 結城沙羅

ナイトハウンドの小隊長。堅物なキャリア上がりの才女。

「面白い仕掛けじゃない……いいわ、魅せてあげる。このわたしの、本気をねッ！」

強気な美貌に、壮絶な笑みが浮かぶ。覚悟を決めた変身ヒロインは、死の網のさらに奥へと身体を滑り込ませた。素早く身体を屈ませ光線を回避、身を翻して前進する。僅かにも触れたら即死——しかし、大きく避けては次の攻撃に対応できない。驚異的な集中力で、少女はギリギリのところで攻撃を回避していく。

「次は……こっちなっ！」

部屋の下部を走る熱刃が、むっちりした美脚を狙う。地を這うように迫るレーザーを、ショートジャンプでかわす。ミニスカートが閃き、タイツに包まれたも肉が躍動した。同時に左半身に接近するブレードを、身体を右方向に捻って回避する。休む間もなく迫る刃を、華麗な軽業でやり過ごす美少女怪盗。アクションのたびに長髪が翻り、豊満な乳房がふるんぷると蠱惑的に揺れた。

「……つく、ふんっ！ ふう、は……っ！」

魅惑の美身に凄まじいまでの集中力を込め、赤い光刃を掻い潜る。華麗に映る回避行動だが、実際には常に死と隣り合わせの危険なダンスだ。噴き出す汗が、仮面の下の美貌をじつとりと濡らしていた、

（っち……！ 流石に、これは結構きついわね……！）

極度の集中力を維持したままの全身運動に、神経が悲鳴をあげる。さしもの天才怪盗とはいえ、神経ガスで蝕まれた身体にはきつすぎた。攻撃を避けながら前進してはいるもの

の、少しずつしか距離を稼げない。焦燥感が、疲労をさらに募らせていく。

「はあ、はあ。つく……ああ!？」

息が苦しい。余裕だった表情に、焦りが宿る。瞬間、危険な位置に刃が迫った。

プウンッ! 真正面から、ちょうど腰の辺りにレーザーが迫る。跳躍してもしかたがない、僅かなタイミングの差で間に合わない——!

「……つち! くう……つつああああ!」

咄嗟の判断。マジカルシャドーは背中を背後に反らし、大きくブリッジの姿勢を取った。抜群の柔らかさで、細い腰が折り曲げられる。しなやかな両足に渾身の力を込め、そのままの姿勢で身体を支えた。卓越したバランス感覚で、ブリッジ姿勢を維持する魔宝怪盗。一瞬の判断で、少女は上半身のみを仰向けに倒した、リンボードダンスのような体勢を取っていた。仰け反らせた上半身を低く保ち、通過する刃をやり過ごす。真上を向いてぶるん、と震えた乳頂を、レーザー波がギリギリの距離で通過した。

「う、くあ……つつ熱うううう!」

通過の瞬間、苛烈な熱量がスーツ越しに乳首を撫でる。伝わる熱さに、マジカルシャドーは背中を仰け反らせたまま苦悶した。必死で床を踏みしめる両足が、辛そうに震える。

「んくううう……っひい。っ、きつう……っ!」

直接触れずとも、至近距離での熱量は痛烈すぎた。魔法の力を動員しても、その威力は殺しきれない。辛い熱さが、衣服越しに性感帯を責める。痛みにも似た熱さに、少女の唇

が戦慄わなないた。さらには無理な姿勢でバランスを取らされ、全身に苛烈な負荷がかかる。

——くうっ、き、きつい……っ！でも、耐えなきや……いまは、動けない……っ！

ぎりりと奥歯を噛み締め、変身少女は意気を振り絞った。刃が完全に身体の上を通過するまで、少しでも動くわけにはいかない。身じろいで触れたら、レーザーの直撃を受け大打撃を被ってしまうのだ。辛くても、いまは我慢するしかない。

「くう、ふ……んっ！くう、う……！」

苦しげに長髪を震わせ、必死に耐える魔宝怪盗。折り曲げられた両足が戦慄き、スーツに汗が滲む。だがいつまで経っても、彼女に解放のときは訪れなかった。

「ん、くう……え、ええっ!? ちよつと、どうして……！」

ブリッジを維持したまま、マジカルシャドーは驚愕に目を剥いた。偶然の悪戯か、それとも魔宝の悪意か。いままで移動を続けていたレーザー波が、少女の真上で動きを止めていたのだ。この姿勢から上体を起こせば、ビームの直撃を胸房に浴びてしまうことになる。黒衣の少女は、きつすぎるブリッジ姿勢から逃れられなくなっていた。

「く……くそお。つくづく厄日ね……い、いいわ。こ、このぐらい……！」

身体を立ち上げることなく、この状況を脱せねばならない——ならば、このまま進むしかない。怪盗少女は上半身を仰け反らせたまま、両足をじりじりと進ませた。ブリッジの体勢を崩さないように、頭のほうへと伸ばした両手で器用にバランスを取る。まるでリンボーダンスを踊るかのような姿勢で、美女はレーザー網の下を掻い潜っていく。

「くう、つふう！ ん、あ……！」

ブリッジ体勢を保つだけでも辛いのに、そのままの姿勢で歩を進めるのは、少女の身体に極度の負担を強いた。曲げた腰と足に走る疲労感に、苦しげな声が漏れてしまう。むっちりと張った太ももにすべての体重がかかり、両足が辛そうに震えていた。

しかも、きついのは足腰だけではない。上体を掠めている光線は、強烈な熱量を発し続けているのだ。仰向けの姿勢でも生意気に吊り上がっている巨乳峰の真上に、責め刃がちやうど位置している。放たれる熱が、スーツ越しにじりじりと乳首を焼いた。

「んふあ……あ、熱ううっ！ ひう、くううう……！」

鋭敏すぎる性感帯を、辛い熱さで炙られる。まるで、溶けた蠟を垂らされているかのようだった。乳頂を觸る灼熱の責め苦に、痛ましい喘ぎをあげる少女怪盗。だが責め苦から脱しようにも、膝を立てた姿勢ではどうしようもない。上体を起こせば一瞬だけは楽になるだろうが、そのあとに待つのは殺人レーザーによる地獄の苦痛だ。罣にかかった変身ヒロインは、苦悶に苛まれながらも屈辱のリンボーダンスを続けるしかなかった。

「くう、ふう、つくう。んくう、これ、きつつ……！」

繊細な器官を、苛烈な熱さが責める。素早く掻い潜ってしまいたいところだが、苛酷な状況がそれを許さなかった。

いまのマジカルシャドーは、限界まで上体を仰け反らせたきついブリッジ体勢を強いられている。仰向けの上半身は、殆ど地面と水平になるぐらいにまで倒されていた。重力に

従い地面に落ちそうになる身体を細腰で支え、二本の足だけでバランスを取っている。全体重を支える足腰に激烈な負荷がかかり、むっちりした太ももは辛そうに痙攣していた。

このままバランスを取り続けるだけでも苦しいのに、そのまま足を進めなければいけないのだ。さしもの怪盗の身体能力でも、ほんの数ミリずつのすり足でしか進めない。

ただでさえ厳しい窮状に加え、神経ガスにやられた身体のコンディションは最悪だ。無理な姿勢で体重がかかり、両足が震える。バランスを取るために伸ばしている両手が震え、指先が苦しげに宙を掻いた。熱責めされるおっぱいからは滝のような汗が噴出し、ボディスーツの内側をじつとりと濡らしている。汗まみれの美貌は、辛そうに歪んでいた。

それでも必死に、少しづつリンボードダンスを進める怪盗に、さらなる受難が牙を剥く。

「くう、く……あ、あ!？」

ブウウ……。怪盗の足先に、新たなレーザー刃が迫る。侵入者を追い詰めるのは、胸上の熱刃だけではない。無数の砲台も、いまだ無規則にブレードを振り回しているのだ。回避しようのない状況で、光の刃が獲物を狙う。

天井の砲台から垂直に伸びている光柱が、地面を舐めるかのようにゆっくりと進んでくる。振り子刃のように進むレーザーの軌道は、ちようど、少女の爪先に位置していた。

——ち、ちよつと、嘘でしょ!? これ、まづいわ……!

迫り来る危機に、さしもの天才怪盗も息を呑んだ。この状況では、立ち上がることも身をおかかわすこともできない。徐々に、そして確実に迫る刃。猛烈な熱量が、痛みとしてプー



ッ越しに伝わってきた。このままでは、足にレーザーが直撃してしまう——！

「くっ、こ、この……んあああっ！」

咄嗟の判断。美女はブリッジのバランスを保ったまま、両足を大きく左右に広げた。ミニスカートが捲れ、白いショーツが露わになる。僅かに触れてしまったブーツの爪先が、ジュワツと音を立てて焼け焦げた。だが間一髪、少女はレーザーとの接触からは免れる。

「くう、く……ひいい、んっ……！」

だが、それで危機を脱したわけではない。足先への直撃は避けたとはいえ、それは破滅を先延ばしにしただけに過ぎないのだ。開かれた両足の間を、レーザーの刃がゆつくりと進んでくる。乳首同様、強烈な熱さに爪先を炙り責められる。

——う、あ、くううっ！ 熱う……く、きつう……いい……！

ギリギリと奥歯を噛み締め、マジカルシャドーは苦悶した。体重を支えるだけでもきつかったのに、大きく足を開いたせいで、余計に身体に負荷がかかっている。さらには両足の間で潜り込んでくる熱量に太ももを齧られ、むっちりした美脚はわなわなと軋んでしまっていた。ショーツ目がけていやらしいほどゆつくり動く刃が、恐怖と焦燥を煽り立てる。

——くううう、苦しい……でも、いまは耐えなきゃ！ もう少しよ、もう少しで……！

涙さえ滲みかけた瞳で、怪盗は天井の砲台を見やった。苦し紛れの開脚回避だったが、彼女の悪運は尽きていない。砲塔の挙動から、じきに刃は進行方向を反転しそうなのだ。

レーザーがこのまま股間に到達するのが早いのか、それとも砲塔の回転が先か——普段な

ら絶対にしたくない賭けだが、いまは運を天に任せて祈るしかない。

「んう、くう……！！ ふあ、つ、く……！！」

だが無情にも、レーザー刃は直進を進めてきた。太もみに触れてしまわないように、必死で股間を開いていく窮地の怪盜。ミニスカートが腰まで捲れ上がり、デルタ部分がはしたなくさらけ出される。先刻の綱摩擦で流されていた愛液と、今回の熱責めで溢れ出した汗とが、ボディスーツの股間部分をねっとり濡らしていた。スーツの中で蒸れた牝香が、むわっと匂い立つ。リンボードダンスのポーズで腰を掲げ、はあはあと悩ましい呼吸を漏らす美少女の姿は、なんとも色っぽくセクシーだった。恥知らずにも大股開きの姿勢で開かれているデルタ部分へ、灼熱の刃が迫っていく。

「はあ、つくひ！ ひん……ふ、あ、熱……うっ！」

じりじりと迫るレーザーの熱量が、ショーツ越しに秘部を炙る。敏感な秘粘膜に染みこくる温度に、美女は苦しげな声をあげ身悶えた。ピク、ピクつと股間が震え、スーツにじつとりと染みが広がる。痙攣しつぱなしの太ももは、いまにも折れてしまいそうだった。

「ひいん、も、もうダメ……！！ 早く……お願い、も、もう止まって……！！」

どんなトラップも警備も、これまで余裕で突破した凄腕怪盜だ。だが、流石に今回ばかりは自力ではどうしようもなかった。目前にまで迫った恐怖に、さしもの強気も悲鳴をあげる。マジカルシャドーは辛そうに喉を仰げ反らせ、思わず情けない声で哀願していた。

恥も外聞もなく限界まで足を開き、必死で腰を引く魔宝怪盜。腰がぐぐつと掲げられ、

はしたない恥部が天に向けて突き出される。痴女の淫阜に、裁きの刃が触れる瞬間、

「だ、だめえ……くああ！ も、もう……ああ、え……!?!」

ブウウ……ン。レーザーは、その動きを止めていた。まさに股間に触れるかどうかの直前、距離にすれば数ミリの余裕しかない。だがそれでも、怪盗の悪運が勝ったのだ。

——あ……た、助かったの……？ で、でも……これって……。

助かったことを理解し、マジカルシャドーははあつと息を吐く。もつとも、それは解放を意味するものではなかった。

なぜならば——これも魔宝の悪意の為せる業だろうか。ビーム刃は動きこそ止めたが、転回することをせず、秘所の直前で停止していたのだ。極限まで接近した熱源から放たれる熱量が、掲げられた少女の股間を容赦なく焼き廻る。

「ひあ……んきい！ これ、あ、熱う……う！ ひあ。く、ん……!」

至近距離の赤熱刃からは、ただでさえ火傷しかねない熱量が放たれている。しかもそれで炙られているのは、敏感すぎる粘膜器官なのだ。たまらない辛さが、腰をのぼって子宮までを責めてくる。変身怪盗は大股開きの恥辱姿勢で、股間を炙られる苦痛に悶え啼いた。

限界まで足を開いているせいで、少女の秘門は左右にくつろげられてしまっている。薄生地越しに伝わる熱が、開きかけた腔内にまで染みしてきた。まるで、鋭敏な秘部にマグマをどろどろと塗りたいくらいに染み出しているようだ。どつと噴出し染み出した汗が、あまりの熱量に一瞬で蒸発する。強烈すぎる熱痛が、少女の下半身を廻り続けた。

ただでさえ耐え難い責め苦だが、悪いのはそれだけではない。ダクト内での綱渡りで、少女の股間はたつぷりと焦れきっているのだ。鋭敏な部分は、いまだに淫らな疼きを孕んでいる。敏感に潤んでいる急所に、こんな苛烈な刺激を与えられれば——

「ひあう、はんっ！ くひいい、ひ、い……！」

カクカクと、切なそうに腰が震える。苦しげな声に、悩ましい艶が混じり始めていた。淫らな摩擦で官能を増した秘所に注がれる、凄まじい熱量。それは責められる女体からいまだ冷めやらぬ官能を引きずり出し、倒錯した感覚を覚えさせ始めていた。

——あ、熱いのに……くうう、っう!? そんな……わたし、何を感じて……!?

気持ちいい——痛みさえ感じるほどの熱さが、少女の身体に異様な反応をもたらしていた。意志に関係なく、鋭敏な膣がびくん、びくんと震え始める。左右にくつろげられた秘門からは、汗だけでなく新たな愛液が漏れ始めていた。鋭敏な膣粘膜は、苛烈な熱責めにマゾヒスティックな快感を覚えてしまっていたのだ。

「う、くうう。バカな、こ、こんなのって……ひあ！ で、でも……つくひいい！」

辛くて苦しい現状に、惨めな悦びを感じているなんて——認めたくない変身怪盗だった。身体は正直だった。じわじわと股間を炙る熱が、あさましい牝悦を昂らせる。大股開きのせいでかかる負荷が、さらなる辛さとして少女の被虐欲を刺激した。苦しげに足が震えるたび、仰向けて掲げられている股間でにちゃつと淫らな音が立つ。痛みとともに感じる、恥知らずな被虐の悦び。想像したこともない感覚が、怪盗を蝕み始めていた。

倒錯した虐待を与えてくるのは、股間責めの熱線だけではない。先ほど掻い潜ったはずの頭上のレーザーが、再び侵入者を追撃してきた。身悶えるたびにぶるんぶると震える両巨乳の上に、再び圧倒的な熱量が接近する。

——ひ、い!? そんな……そこっ、ま、また……!

涙に潤む瞳を震わせ、思わず息を呑む淫虐のヒロイン。焦慮と期待感で乳首が勃起し、スーツをぶつくらと押し上げる。見るからに敏感そうな肉豆を、ギリギリの位置で熱線が掠った。

「ひ、乳首……ひあ! 熱……いいいっ!」

瞬間、駆け巡る痛み混じりの快感。切ない苦しみに、少女は喉を仰け反らせて悶え啼いた。頂点からおっぱいにまで染みてくる乳悦に、たまらず両足を戦慄かせてしまう。ブリッジ姿勢が僅かに崩れ、震える腰がピンと突き出された。結果、灼熱の刃と秘部がいつそう接近してしまう。威力を増した熱量が、ショーツ越しに秘粘膜を責めてくる。

「ひんっ……くひあああ! はうっ、くふうううん!」

拷問じみた熱さが、繊細な器官を焼きつくす。たまらず身体を揺すれば、揺れた乳首と淫裂でさらなる快感を覚えてしまう。辛いほどの切なさには、マゾヒスティックな悦びを教え込まれる仮面怪盗。仰け反らされた細頸は、ぴくんぴくんと辛そうに痙攣していた。

——う、ううう……っはああ! こんなので……ああ、う、疼いちゃう……!

まるで、チロチロと動く炎の舌で乳首をしゃぶられているようだった。切なげに身悶え

る少女だったが、被虐の淫熱は、しかし疼く肉体を満足させるものではない。熱責めはあくまで感覚的なものに過ぎず、物理的に肉体を可愛がつてくれるものではないのだ。辛さと同時に駆け巡るもどかしさに耐えられず、マジカルシャドーは淫らに身体をくねらせた。「くひ、熱……はあ、ダ、ダメえ！ こ、こんなの……つつひい、も、もういやあ……！」

辛さと切なさの二重奏に、さしもの天才怪盜も弱音を吐いた。だが無機質な責め手には、少女の哀願など届くはずもない。それどころか、股間責めの刃も乳首を焼く熱線も。ピタリと動きを止め、もつとも辛い位置で少女を苛み続けてくるのだ。

——くあふつ、はひいひい！ こんな……ど、どうして、移動しないのよ……!?

切れ長の瞳に涙を滲ませ、マジカルシャドーは必死で天井を見やった。いままでめちゃくちゃに振り回されていた光剣は、ちょうど、少女が一番感じる場所で動きを止めている。砲台はまるで動力が切れたかのように動きを止めており、二本の刃は急所の直前で停止しているのだ。淫らな熱が薄生地を炙り、鋭敏な局所をねとねと剝つてくる。

「熱、ひい……も、もういやっ！ は、早く移動してよ……く、ひいひい！ こ、このままじゃ、わたし、もお……！」

ガクガクと足が震える。乳首もアソコも切なすぎて、昂りすぎた性感のせいで集中力が保てない。淫らに踊る股間からは、ねとつく愛液が溢れ出して止まらなかつた。

「うあ、あ……ううう！ ひい、も、もう……うああ、このままじゃ、イ……！」

切れ長の瞳が、焦点を失いかけた。引き攣る唇から、悔しげな声が漏れる。もう限界だ。

意識が保てない。このままでは、もういつてしまひそうだった。

——せ、切なすぎるわ……も、もうイキたい……薬になりたい。でも、でも……お！

ふるると美貌を震わせ、マジカルシャドーは必死で自我を振り絞った。絶頂して脱力してしまえば、リンボーダンスの姿勢を保てるわけがない。もどかしい切なさからの解放と引き換えにもたらされるのは、殺人レーザーに打ち抜かれる凄惨な敗北なのだ。

「だめ、だめえ……イ……ひ、だめ！ イかないで……イ、いつちゃ、だめえ……っ！」

血が出るほどに強く、少女は唇を噛み締めた。細い指先に必死で力を込め、全身を緊張させて意気を振り絞る。イキたい、でもいつてはダメだ——人並みはずれた克己心で、マジカルシャドーは湧き上がる絶頂感に抗い続けた。愛液をしぶかせながら、物欲しげに肢体をくねらせ恥辱のリンボーダンスを踊る。必死でアクメを堪えながら悶え続ける嬌態は、見るからに惨めでいやらしかった。

そんな健気な抵抗を嘲笑うかのように、股間のレーザーが再び移動を始める——少女の望みとは、まったく逆の方向へ。

——な、え、あああつ!? そ、そんな……また、こっちに向かつて……！

最悪の事態に、少女は声を失っていた。一度は動きを止めた刃が、再び股間目がけて進んでくる。ただでさえギリギリの位置だったのだ。これ以上迫られたら、もう——！

「ひ、だめ、ダメえええ！ こ、こないで……そこ、当たっちゃ……ひきいいい——！」

ジュウ、ジュジュジュジュジュ！ 淫惨な悲鳴とともに、シルクが焼け焦げる音が響く。

無慈悲に振り下ろされた熱の刃が、少女のデルタ部分に直撃したのだ。

「ひあ、熱……っひつきいいいいい！ んあああ、ひあ、いあああああー！」

もっとも敏感な部分を焼きつくす、地獄の灼熱。魔法防御により衣服も身体もなんとか無事だが、伝わってくる熱痛まではどうしようもない。秘粘膜を焼きつくされる壮絶な熱痛に、マジカルシャドーは喉を仰け反らせて悶え狂った。なんとか体重を支えている両足が、ガクンガクンと激しく痙攣する。

「ひいつ！ ひいつ！ んああ……くあ、はっひいいいいいいい！」

怪盗を責め立てるのは苦痛だけではない。熱刃を押し当てられた股間をくねらせ、声の限りに泣き叫ぶ淫虐のヒロイン。その声には、惨めな被虐の悦びが滲んでいた。

——うあ、すご……熱くて、か、感じちゃうう！ こんな……す、すご……いいい！

物理的な接触ではないとはいえ、絶頂寸前の秘所を射抜かれたのだ。焦れきった牝の官能が耐えられるものではない。昂りきった弱点を灼熱の舌で穿り回され、マゾヒスティックな快感が木霊する。これまで必死で堪えていた分、その悦びは強烈だった。

——くひあ、だめ、だめ……！ イク……わたし、このままじゃ、も、もうイ……！！

ジュツ、ジュウウウ！ 無慈悲に進む刃が、潤む股間を抉り穿つ。レーザー刃に神経を焼きつくされ、少女の意識が明滅する。熱くて気持ちよくて、もう我慢できない——！

「ひいつ……イ、イっちゃだめなのにい！ こんなっ、も、もう許して……いやあ！」

怖いぐらいの激感に、さしもの強気も挫かれる。勝気な瞳に涙を湛え、マジカルシャド

「は惨めな声で慈悲を請うた。愛蜜に濡れた両足が痙攣し、リンボーダンスの姿勢がガクと揺れる。この状態で動いたらどうなるか——わかつていても、もうじつとしてなどいられない。蕩けていく腰に力が入られず、倒れていた上半身が浮いてしまう。瞬間、ふるるんと震えた両巨乳の先に、待ち構えていた光刃が突き刺さった。

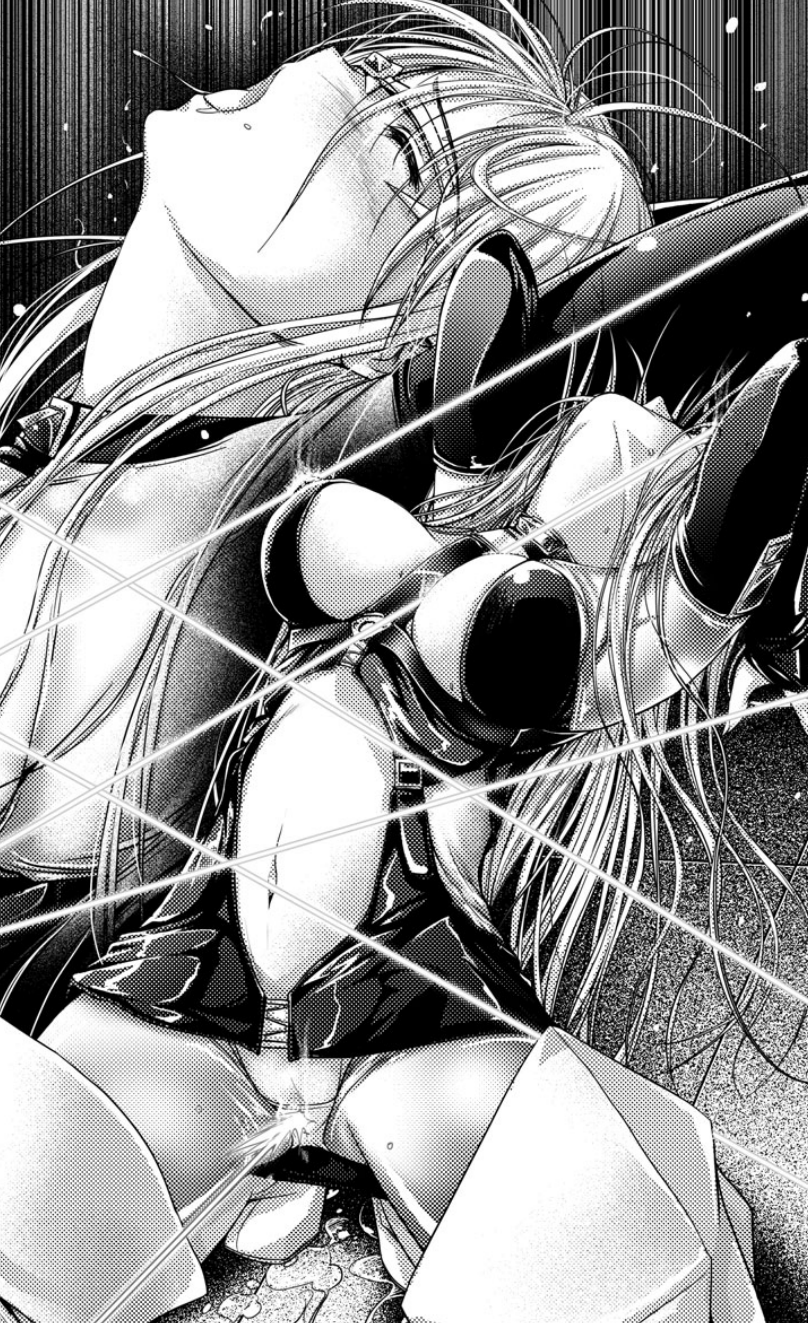
「ひ、ひぎああああ!? そんな……お、おっぱいまでえ……ひあ、熱い、熱い……」

ジュウウ、ジュウジュウジュウ！ 黒いボンデージを、赤熱する刃が焼き焦がす。くつきりとスーツに浮き出していた肉豆を焦がす、苛烈すぎる熱と痛み。乳腺を染みておっぱいまでに熱が流れ込み、乳肉すべてが焼けてしまひそうだった。焼きごてを乳首に当てられたかのような虐悦に、マジカルシャドーは両巨乳を痙攣させて悶えまくる。

「くあっひい、熱ひっ、熱ひいひい！ ち、乳首すぎすぎ……うあ、アソコも……も、燃えちゃうううう！ ひああ、こんなあ、こんな……つくひいひい！」

全身を焼きつくす官能の炎。地獄じみた淫悦に、少女は長髪を振り乱し悶絶する。灼熱の直射を受け、股間も乳首も溶けてしまひそうだった。崩れかけたリンボーダンスの姿勢で、激しく身体を揺すり身悶える。Dカップのおっぱいがぶるんぶるんと左右に振られ、高く掲げられた腰がぐいと高く突き出された。全身からはねっとりした発情汗が噴出し、フェティッシュなスーツをぬるりと濡らしていく。限界まで顎を反らし絶叫する美貌には、苦痛とともにマゾヒスティックな悦びが浮かんでいた。

——うああ、あ、熱くって……も、もうダメえ！ こんな、わたし、もお……！



復讐と獣欲に燃える魔宝の所有者たちに、沙羅は事務的に告げた。部下たちにも、厳格な命令を下す。

「お前たちもわかっているな。これは隊の汚名を雪ぐ最後の機会だ。自らの手で裏切り者を肅清しろ！」

迷っていた隊員たちも、その声で何かが切れた。事実を受け入れ、怒りと憎悪が迷いを掻き消す。地獄の猟犬に餌を与えると、沙羅は踵を返しその場を去った。

「た、隊長……っ。待って、待ってください……!?!」

すがりつくように腕を伸ばす舞夜だったが、遠くなる背中には届かない。震える腕を、男の拳が驚掴む。

「やってくれたな各務う……」

怪盗の腕を捉えたのは、ナイトハウンドの実技指導教官だった。いかつい強面は、憤りで紅潮している。

「どんなにお荷物でも、俺はお前のこと大事な仲間だと思ってたんだ。それをお前は……許さねえ！」

「そうだ、許せるはずがねえ。泥棒猫め、隊の名誉に泥塗りやがって。こんな屈辱、初めでだぜ……!」

憤慨しているのは教官だけではない。四十を超える特務隊員は、みな憎悪の形相を浮かべていた。それも無理はない。なにせいままで一緒に正義の旗の下で戦っていた仲間が、

めんなさい……」

消え入りそうな声で、少女は何度も何度も陳謝する。仮面を剥がれずすべての力を失い、仲間に侮蔑され戦う意味まで奪われたヒロインは、元の弱気な女の子に戻ってしまった。正義を折られ罪悪感に駆られる少女は、もはや涙ながらに許しを請うしかない。

舞夜に残されたマジカルシャドーの面影は、妖艶な肢体と挑発的なコスチュームだけだった。熟れた媚肉を飾る破れかけの衣装は、彼女の犯した罪の象徴にも見える。魔性の肢体はそのままに、抗う力も強気も失った少女怪盗の姿は、惨めな敗残美にまみれていた。

「ごめんなさい……。わたし、わたし……ひい!？」

壊れたように「ごめんなさい」とだけ言い続ける舞夜。悲壮な言葉を搾り出す唇に、ぬるりとしたものが擦りつけられた。その感触に驚いて顔を上げると、ズボンから剥き出された勃起男根がそそり立っている。眼前に聳える猛根は、罪人を裁く断頭台にも見えた。

——これ……お、男の人の!? や、怖い……!

眼前に聳える怒張根に、舞夜は怯えた表情を浮かべた。むっちりとした体つきに似合わず、臆病な少女に男性経験はまだまだない。初めて目にする異性の器官に、純情少女は恐怖さえ感じてしまう。

「……舐めろよ各務。償う意志があるなら、身体で見せてみる。さあ、さっさと舐めて証明してみせろ!」

剛茎を突き出した教官は、有無をいわさぬ口調で命令した。ただでさえ逞しい逸物は、

憎悪と欲情でパンパンに膨張しきっている。先走りに濡れた猛根からは、むせ返るような男性臭が立ちのぼっていた。

——そんな……。こ、こんなのを、お口で……？

恐怖と羞恥が心を覆う。小さなお口では、この巨根を呑み込むだけでも精一杯だろう。怒り狂う生殖器官を口奉仕で満足させるなど、できるはずがない。

「おいどうした、そんなこともできねえのかよ。はっ、やはり口だけか。いままで俺たちを騙してた牝猫に、反省する気なんてあるわけねえよなあ！」

「ち、ちがっ……違いますっ！ わ、わたしは……」

後ろめたい事実を引き合いに出され、舞夜は咄嗟に反論する。悪の烙印を押されるのは、純真な少女にとつて最大の恐怖であり恥辱だった。それならば、たとえ敗北を認めても正義に殉じたほうが——追いつめられた泥棒猫は、もはや恥辱の命令に従うしかない。

「し、します。わたし、なんでもしますっ！ 一生懸命償いますから、もう、これ以上責めないで……」

ぼろぼろと敗北の涙を流しながら、舞夜は屈辱の忍従を決めた。M字開脚での座位から膝立ちの姿勢に移行し、首を伸ばして男の股間に顔を近づける。

「んあ、お、おっきい……んちゅ、ん、はむう……」

怒り狂う巨根は、しゃぶるだけでも精一杯だ。だが、もはや選択肢などないのだ。罪悪感に駆られる少女は、限界まで顎を開いて一気に亀頭を頬張った。喉が塞がり、息が詰ま



25 緊急送還 機内乗客十九名

る。すえたような腐臭に嫌悪しながらも、変身少女は覚悟を決めて雄棒を啜え込んでいく。——す、すごい臭い。それに、熱くて硬い……。これが、男の人の……なんだ……。

初めて味わう雄肉の感触に、純情少女は狼狽する。レズプレイで舐める細指とはまるで違う、獣のような猛々しさ。ただ含んだだけだというのにお口の中がパンパンに満たされ、正しい律動に恐れを禁じえない。動かされてもいないのに、口腔を犯されているようだった。喉奥まで満ちてくる被虐感に、涙が滲む。

「おい、何ぼっとしてんだ。とっとと舌動かせ！」

「は……は、はいい。んちゅ、んむ。く……ふう！」

雄壮な存在感に圧倒されつつも、舞夜は初めての口淫奉仕に臨んだ。火傷しそうな熱さの雁首に恐る恐る舌を這わせ、ゆっくりと頬を前後させて口全体で竿を抜く。だが怯え混じりの初心な舌技などで、猛り狂う剛棒を満足させることなどできるはずがなかった。

「おいおいなんだそれは。やる気あるのか各務！ 全然気分入ってないじゃねえか、ふざけてんのか！」

「ひっ!? す、すみません……。れ、れも、そんなこぼ言われへも……。んちゅ、ん、んううっっ！」

飛ばされる叱咤に、怯えた声を漏らす。フェラチオどころか、ペニスに触れるのさえ初めてなのだ。一体どうすれば、お口で男を悦ばすことができるのかさえわからない。それでも舞夜は必死になって舌を閃かし、小顔を前後させて肉棒キャンディを舐め続けた。恥

辱の奉仕に臨む表情は、なんとも健気でいじらしい。

「ふんっ、ダメだダメだ。まったく反省の意志が見えんな。これはきついお仕置きが必要のようだね……」

悲壮な表情に嗜虐心を擦られたか、企業重役の一人が少女の前に歩み出る。魔宝に魅入られている男は、ジッパを下ろして自慢の逸物を取り出した。

「え、お、お仕置ひっへ……ひ、あああっ!？」

恐る恐る声の方向を見やり、舞夜は怯えた声をあげた。ライトフラッシュに照らし出された男のペニス、あまりにおぞましい造形を誇っていたのだ。

教官の怒根に比べれば、大ききこそ幾分小ぶりだ。だが重役の持ち物は、肉身の諸所に魔宝が埋め込まれた、無数の硬瘤を実らす改造ペニスだったのだ。異常な凹凸に鎧われた凶器は、人間の性器とは思えない。

「また盗まれてはかなわんからね。大事な宝石は、こうして肌身離さず持つておくことにしたのだよ。嬉しいだろうマジカルシャドー？ なにせ、大好きな宝石を膾の中でたつぷりと味わえるのだからね！」

——ひ……そ、そんな！ あんな……あんなの入れられちゃったら、わたし……!？」

ライトの光を浴びて、ペニスを飾る宝石が妖しく輝く。いまだ男のものも知らない幼膾にこんな凶器を突き刺されたら、一体どうなってしまうのか——死すら予感し、変身少女は紫髪を震わせた。膝立ちの姿勢のまま、思わず腰を引こうとする舞夜だったが、

「これは実刑だ。お前に拒否権なんてねえんだよ！」

周囲を囲むナイトハウンドに、がっしりと両肩を押さえ込まれてしまう。さらには細い腰も支えられ、女犯罪者は膝立ちの姿勢で拘束されてしまった。

「流石に市警のエリート部隊、いい仕事をする。しっかり押さえつけておいてくれたまえよ、くくく！」

怯える美少女に、対面位で身体を重ねる中年重役。挿入折檻から逃れようともがく舞夜だったが、警官隊に押さえ込まれては動けない。小さく震える腰に、男の指が伸ばされた。セクシーなミニスカートが捲り上げられ、濡れたパンティが窺り取られる。

「ひ、う！ いやあ……は、恥ずかひい……い」

股間にびっちり吸いついていた濡れ布を剥がされ、妖しい解放感が駆け抜けた。童顔を赤らめ、媚びた声で恥じらう女泥棒。オナニーピストンで爛れきった秘苑が、白光の下にさらけ出された。

「おおっ……！」

蜜汁を反射させぬらぬらと輝く秘肉に、市警たちは歓喜の声をあげる。女怪盗の持ち物は、魔性の肉体に相応しく成熟した造りをしていた。もちもちと柔らかそうな陰唇に、発達した大きめのクリトリス。いまだ先刻の絶頂が忘れられないのか、それとも下される恥刑にマゾヒスティックな期待を抱いているのか、皮を剥いて勃起した様がなんとも淫らだった。桜色の粘膜を僅かに覗かせたクレヴァスは、まるで餌をねだるかのようひくつ、

ひくつと蠢いている。長髪と同じ妖美な紫の恥毛が、肉付きのいい秘丘を妖しく彩っていた。少女婦警の持ち物は、いまだ男のものを知らないとはまるで思えない、早熟淫靡な熟果実だった。

「ふふ、なんだねこのいやらしい持ち物は。性根の腐った犯罪者はアソコまで爛れておるのか、ふはは！」

「ひ、あああつ。い、いや……見ないれえ。そんな恥ずかひいこほつ、い、言わないれくらさい……！」

下卑た言葉に羞恥を煽られ、変身少女はふるふると首を振った。だが初心な恥じらいに反し、淫らな下のお口はにちゃにちゃと涎を垂らし痙攣を速めていく。抵抗することをやめた少女の肉体は、これから為される淫辱に、自虐的な期待感を覚えてしまっているのだ。「おいおい、こんなに蜜を垂らして、まるで説得力がないぞ。嘘つきは泥棒のはじまりだな、お仕置きだ！」

「ひ、あ!? そんふあ、い、いきなりなんへ無理……つふあ、あつはああああ——！」
ぐじゅ、ぐじゅぶううつ！ 陰惨な絶叫をBGMに、いきり立ったペニスが爛熟華を穿つていく。膨張した亀頭が秘門を押し開き、硬質な肉身が柔壁を蹂躪する。蜜まみれの粘膜が、無数の寶石に掻き毟られた。

「んああ……あ！ あ！ ひぎい、つはああ——！」

炸裂する激痛に、少女は顔を反らし絶叫した。男を知らない膣穴を、荒々しい挿入が責

め立てる。寶石入りの凶器で蜜洞を削られ、引き裂けそうな激感が脳天にまで駆け巡った。だが初めての男根挿入が与えてくれたのは、耐え難い苦痛だけではなかった。

下のお口で初めて味わう、男の人の性器の味——熱く硬く、そしてあまりに逞しい。どくつ、どくつと脈動する肉の鼓動が、牝の官能を本能的に昂らせた。貪婪な膣壁がきゅうつ、とペニスを締めつけると、硬い宝石が髪に食い込んで熾烈な悦びが迸る。膣穴すべてを埋め尽くされ、支配されるかのような被虐感——こんな感覚、初めてだった。

——こ、こんなあ……うああ、おつききて、太くて……！　すごいいつ、こ、壊れちゃいそお……！

未曾有の快感が、少女の理性を翻弄する。初めて受け入れる異性の生殖器は、醜悪な外見からは想像もできないほど心地よかった。男と女が互いに身体の一部を交わらせる、本来あるべき性行為は、いままでレズ愛撫と器物姦しか知らなかった牝膣を一瞬で虜にした。宝石摩擦の痛みがアクセントとなり、膣内挿入の愉悅をいっそう増加させる。切なげに震える瞳は、マゾヒスティックな幸福感を訴えていた。

「どうした？　気持ちよすぎて声も出んかね？　だがお仕置きはこれからだよ、ほら、ほらほらほらあ！」

「んあ、あ、あ!?　ひっ、は、激しひい——！」

ずぶっ、ずぶずぶぶっ！　魔宝の傀儡は、狂ったように激しく腰をピストンさせてきた。入れられただけでも気持ちよすぎた肉根に膣奥までを蹂躪され、たまらない肉悦が駆け抜

ける。寶石の凹凸に髪が巻き込まれ、そのまま前後に抜き差しを続けられるたび、お腹が壊されそうなほどの快楽電撃が迸った。

——うあ、すごい、すごい……！ お仕置きされるの……お、男の人の……すご、気持ちいい……！

仮面とともに抵抗心も奪われた怪盗は、与えられる快楽に加速度的に傾倒していく。罪悪感も絶望も恥辱も、快感の前では忘れられた。汚された正義のヒロインは、墮落という名の救済にすがりついていく。

「はあ……んふあ、ひいひい。んちゅ、んうう……！」

心が挫け、身体が堕ちていく。挿入快楽に溺れるうち、自然とフェラチオ奉仕も激しさを増した。本能的に快楽を貪るべく、しなやかな舌が激しく翻る。涎をたっぷり塗りながら、舞夜は教官の肉棒を舐め慰めた。

「いいぞ、上手くなってきたな。そうだ各務、お前はやればできる。その調子でしっかりと舐めるんだぞ！」

「ふあ、はひっ。わかりまひはあ……ぷ、ちゅ……」

努力を認めてもらえたことが、ものすごく嬉しい。信念をもちがれた少女は、淫らな賛辞にさえ倒錯した達成感を感じてしまっていた。大きな垂れ目をうっとり潤ませ、舞夜は肉棒キャンディをしやぶりまくる。お口に染みてくる先走りの苦味が美味しくて、怪盗少女は一心不乱に勃起根を貪り続けた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>